

香川県長福寺出土の木簡

— 備蓄錢に伴って出土した木簡 —

はじめに

日本古代において、木簡が広く用いられ重要な記録・伝達機能を果たしていたことが判明したのは、一九六一（昭和三六）年に平城宮跡で木簡が出土して以来のことである。^①しかし、それ以前においても、少数ではあるが木簡の出土はあった。これまでのところ、出土時の古い木簡として著名なものとしては、①秋田県弘田柵跡出土木簡、②三重県柚井遺跡出土木簡、それに③秋田県怒遺跡出土木簡があげられよう。①は一九三〇（昭和五）年上田三平・藤井東一氏らによって発掘されたものである。瀧川政次郎氏の「短冊考」^②は本木簡を取りあげ、それが奈良・平安時代の文献に見える短冊にあたり、日本古代においても木簡の使用があったことを解明したもので、木簡の先駆的研究として著名なものである。②は①より古く一九二八年に、桑名郡多度町柚井で三点出土したものである。これらについ

館 野 和 己

ては、『木簡研究』誌上に榮原永遠男氏の詳細な研究があるので、^③それを参照していただきたい。次に③はさらに出土時期が遡り、一九一四（大正三）・一五年の調査で出土したものであるが、現在行方不明になっており、詳細はわからない。^④

しかるにそれらより古く、既に明治年間に出土し、それを伝える新聞記事が残り、かつ実物も現存しているという木簡がある。それを今回紹介しようと思う。なおこの木簡は備蓄錢に伴うものであり、備蓄錢の出土例としてこれまでも木簡共々紹介され、展示されたこともある。^⑤しかし現存する木簡出土第一号であるという点を含め、木簡そのものに関してはあまり触れられていないので、ここに取り上げるのも意味のないことではなからう。

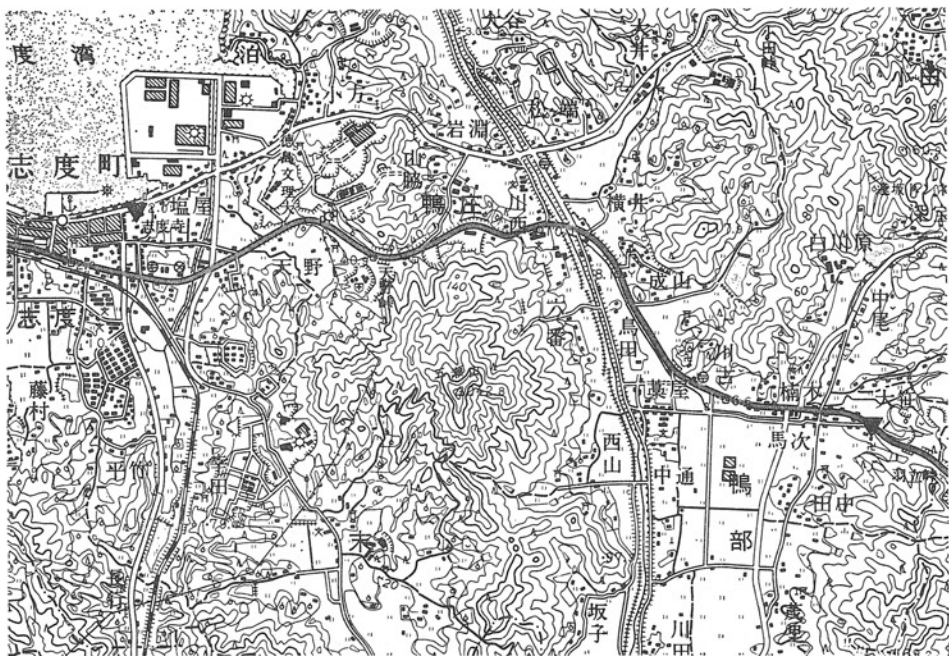
一 木簡の出土状況

本稿で取りあげる木簡が出土したのは、香川県大川郡志度町鴨部^{かべ}

にある長福寺の境内である。志度町は大川郡の西北部に位置し、北は瀬戸内海に面し、三つの岬が伸び志度湾・鴨庄湾・小田湾を形成する。他の三方は山に囲まれ、五瀬山を主峯とする山脈が南北に走り志度町を東西に二分している。長福寺はその五瀬山の東、高松から町内を東西に走り阿波へと通じる志度街道（国道二一号线）が、鴨部の小平野から羽立峠へと、山間部に入りかけた南側に位置している。

現在長福寺は真言宗善通寺派に属し、千手山総持王院と号している。⁽⁶⁾ 本尊は千手観音菩薩像。薬師堂に安置されている薬師如来坐像は、もと鴨部神社（鴨部八幡宮）の別当寺であった西光寺の本尊であったが、神仏分離の際に廃寺となったのに伴い、本寺に移された。檜の一木造り、平安後期の作と見られ、国の重要文化財に指定されている。

長福寺の創建については、かつての長福寺の本寺である極楽寺に関わる「紫雲山極楽寺宝蔵院古暦記」⁽⁷⁾には「天長元（中略）夏四月、奉勅空海和尚建極楽寺」（中略）、秋七月、長福寺・来覚寺、以三観音・勢至為三本尊、表三安養世界」（中略）、同月（九月）十七日、建立鴨部東山長福寺、本尊千手観音安像供養」という記載があり、また嘉永六（一八五三）年『讃岐国名勝図会 寒川郡二』に「当寺は弘法大師建立なり、左の方に来覚寺を立、勢至菩薩を安置し、右の方に当寺を建て、観音薩埵を安置すと宝蔵院の旧記に見えたり」と記す。⁽⁸⁾



（高松西部五万分の一）

長福寺(右)と志度寺(左)



長福寺(『讃岐国名勝図会 寒川郡二』)

一九〇四(明治三七)年二月二日、本堂を改築しようと裏山の切り取り工事をしていたところ、皿で蓋をした壺が地中から現れた。その中には大量の銭が入っていたが、さらに一枚の文字を書いた木札があった。これこそ現時点で最も出土の早い木簡ということになる。この備蓄銭と木簡の出土を伝える新聞記事が残っている。それは出土から一週間後の、明治三十七年二月九日付けの「香川新報」である。ここでその記事を引用してみよう。ただし、文字が不鮮明な箇所がいくつかあることを、お断りしておく(括弧内は引用者注。文字は常用体に改め、句読点・濁点は補った。またルビは一部を除き、省略した)。

支那古銭の発掘 大川郡鴨部村大字鴨部東山の真言宗長福寺住職佐

伯寛良師は、本堂を改築せんとし、今回境内の東端なる高地を開墾しつゝありし所、去る二日午後一時頃工夫が一個の瓶を掘り出し、住職に斯様(こんな)ものが埋めてありしと差出したるを見れば、瓶は土焼にて高さ一尺三寸、口径四寸六歩(まま、分)にて、胴は非常に張り居りて、実に三尺三寸廻りあり。中を(あらた)めしに、開元、宗朝、天聖、紹聖、政和、元豊各通宝あり。唐玄(まま、周カ)通宝等もありて、総て支那古銭なるも、多くは錯の為め古(まま、固カ)着し居れるが、尚ほ瓶中に一個の木札あり。高さ六寸、幅八分にて、表には「九貫文、花嚴坊、賢秀御坊」とありて、裏面には「文明十二年三月十九日紋(まま、白)」と記されたり。之に由て考ふれば、長福寺を当寺(まま、時)花嚴坊と称し、時の住僧賢秀なるもの、古銭を愛翫しつゝありて、紀念の為め埋蔵せしものならんかと云へど、何分四百廿余年後の今日とて、寺記を調査するも花嚴坊の事すら判明せざる由なるか。古銭は成規に依り、津田警察分署へ差出したれば、同署に保管しある由。

筆者は一九八七年五月二二日に、瀬戸内海歴史民俗資料館(当時)の斉藤賢一氏のご案内で、さらに一九九一年九月三〇日には、志度町の元助役岡村信男氏のご案内で再度長福寺を訪れ、ご住職佐伯泉澄氏にお話を伺い、出土品を拝見させていただいた。佐伯氏によると、先々代住職の佐伯寛良氏による本堂の改築工事は、一九〇四年

に始まったが、その年勃発した日露戦争のため中断し、戦後の一九〇七年に竣工したということである。⁽⁹⁾ その間本堂北側の、丘陵斜面にあたるところを切り崩す工事中、姥芽樫の大木を切り倒したところ、その根元から素焼の皿で蓋をした古備前の壺が出土し、中には唐・宋の古銭が大量に入っていたとのことであった。そしてまた皿の上には、さらに布目瓦二・三枚が置いてあったという佐伯寛良氏の談話も伝えられている。⁽¹⁰⁾ こうした出土状況からすると、この壺が意図的に埋納されたものであることは明らかである。

境内地の東寄りにある現本堂の左手（北側）の一段高い所には、前述した重要文化財の薬師如来像を安置する薬師堂がある。本堂と薬師堂ののる地面の段差は垂直に3mほどあるが、これこそ明治の工事で本堂拡張のため、丘陵斜面を切り取った結果である。現在、木簡・壺・銭等の出土品はその薬師堂に、保管・展示されている。⁽¹¹⁾

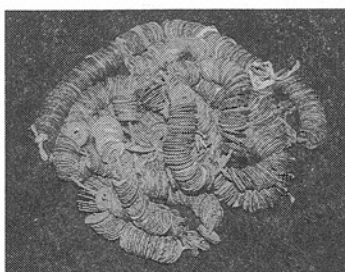
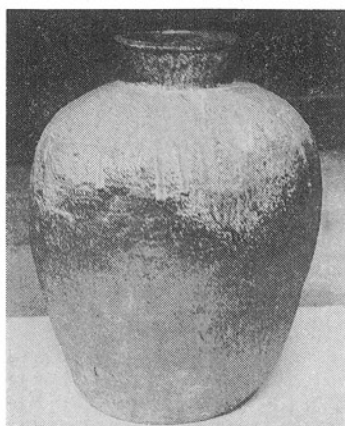
壺は高さ四一cm、口径一四cm、底径二〇cm、最大径三一cmを測る。⁽¹²⁾ 胴部に穴があいているが、これは発見時に工事の鶴嘴があたつてきたものである。その特徴を千葉幸伸「讃岐の備蓄古銭展」⁽¹³⁾は「赤褐色、口縁から肩部にかけて黄白色の自然釉がかかり、玉垂れがある。大は径九mmに及ぶ砂粒を含み、焼成後剥落した痕もある。焼成は固い。横にろくろ成形の痕もある。高さ二〇cmの所まで内側に銭痕」と解説している。

さて、壺中の銭は出土時は、藁で百枚ずつ連ねてあったという。

銭種	王朝	初 鑄 年	枚数	備 考
開通元宝	唐	武徳四(六二一)年	一一	
乾元重宝	唐	乾元元(七五八)年	一一	
周通元宝	後周	顯徳二(九五五)年	二	
宋通元宝	宋	建隆元(九六〇)年	八	
太平通宝	宋	太平興國元(九七六)年	七	
淳化元宝	宋	淳化元(九九〇)年	七	
至道元宝	宋	至道元(九九五)年	七	
咸平元宝	宋	咸平元(九九八)年	九	
景德元宝	宋	景德元(一〇〇四)年	一	
祥符元宝	宋	大中祥符元(一〇〇八)年	八	
祥符通宝	宋	同右		

上・長福寺本堂(西から)、下・出土地点付近(右に本堂、左に薬師堂がある)





上・壺、下・出土銭(一部)

新聞記事のように錆びて癒着したものが多く、正確な数は不明であるが、本来木簡記載のように九貫文Ⅱ九〇〇枚あったと見られる⁽¹⁴⁾。具体的な銭種は、『町史上巻』(二三頁)によると、最古の唐の開元通宝(開元通宝)から最新の明の永楽通宝まで、唐・後周・宋・南宋・明の三五種の銭にのぼるが、調査したのは一部であり、精査するとさらに増えるかもしれないという。その後、一九七六年に瀬戸内海歴史民俗資料館で「讃岐の備蓄古銭展」を開催するにあたり、同館(当時)の千葉幸伸氏が薬師堂に展示してある銭二九七枚について調べられたところ、別表のように*印を付けた八種類が増え、計四三種になった。ただこれも出土した銭のごく一部であり、当初何種類あったかは不明である⁽¹⁵⁾。しかし大勢として、唐の開元通宝(開元通宝)から明の永楽通宝までという銭の年代幅は、動かないであらう。

本表は千葉幸伸氏の調査による。*印は『新編志度町史上巻』に見えないもの

天禧通宝	宋	天禧元(一〇一七年)	一〇	背文「十四」
天聖元宝	宋	天聖元(一〇二三年)	三	背文「二」
明道元宝	宋	明道元(一〇三二年)	二	背文「三」
景祐元宝	宋	景祐元(一〇三四年)	五	背文「二」
皇祐通宝	宋	皇祐元(一〇三九年)	二	背文「元」
至和元宝	宋	至和元(一〇四四年)	三	背文「元」
至和通宝	宋	同右	一	背文「元」
嘉祐元宝	宋	嘉祐元(一〇五六年)	一	背文「元」
嘉祐通宝	宋	同右	一	背文「元」
治平元宝	宋	治平元(一〇六四年)	一	背文「元」
治平通宝	宋	同右	一	背文「元」
熙寧元宝	宋	熙寧元(一〇六八年)	三	背文「元」
元豐通宝	宋	元豐元(一〇七八年)	七	背文「元」
元祐通宝	宋	元祐元(一〇八六年)	四	背文「元」
紹聖元宝	宋	紹聖元(一〇九四年)	一	背文「元」
元符通宝	宋	元符元(一〇九八年)	一	背文「元」
建中靖国元	宋	建中靖国元(一一〇一年)	二	背文「元」
大觀通宝	宋	大觀元(一一一〇年)	二	背文「元」
政和通宝	宋	政和元(一一一一年)	二	背文「元」
宣和通宝	宋	宣和元(一一一九年)	二	背文「元」
淳熙元宝	宋	淳熙元(一一七四年)	二	背文「元」
紹熙元宝	宋	紹熙元(一一九〇年)	二	背文「元」
慶元通宝	宋	慶元元(一一九五年)	二	背文「元」
開禧通宝	宋	開禧元(一二〇五年)	二	背文「元」
嘉定通宝	宋	嘉定元(一二〇八年)	二	背文「元」
紹定通宝	宋	紹定元(一二二八年)	二	背文「元」
端平元宝	宋	端平元(一二三四年)	二	背文「元」
淳祐元宝	宋	淳祐元(一二四一年)	二	背文「元」
皇祐元宝	宋	皇祐元(一二五三年)	二	背文「元」
景定元宝	宋	景定元(一二六〇年)	二	背文「元」
咸淳元宝	宋	咸淳元(一二六五年)	二	背文「元」
永楽通宝	明	永楽元(一四〇三年)	二	背文「元」

別表 長福寺出土の渡来銭

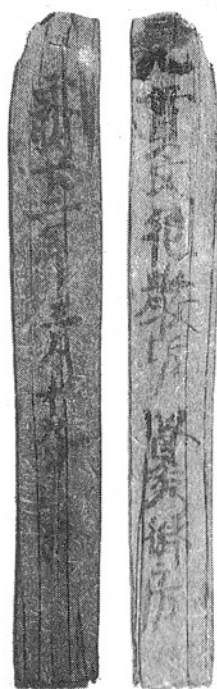
二 木簡の内容

出土した木簡は、杉の板目材で、長さ一八〇mm、最大幅二四mm、厚さは中央部が最も厚く三mm、上端一mm、下端で二mmである。⁽¹⁶⁾ 上端の右肩は薄く、かつ欠けた形になっているが、これは後に折れたのではなく、削って成形した時に、削りすぎたものと思われる。したがって完形の短冊形（〇一一型式）と見てよい。下端は裏面から切れ目を入れて折っている。自然乾燥による保存状態がよく、表面に細かいかき傷はあるが、墨はよく残り肉眼で文字がはっきり読める。文字は表裏両面に書かれている。先の新聞記事には文字の一部に誤りがあるので、ここにもう一度掲げておこう。

・九貫文花嚴坊賢秀御房

・文明十二年三月十九日敬白

文明一二（一四八〇）年に花嚴坊賢秀御房が九貫文の錢を埋納したことを、この木簡は物語っている。これまでも日本の各地で備蓄錢が出土しているが、⁽¹⁷⁾ このように文字史料によって埋納の時期・主体が知られる事例は他にほとんど無く、⁽¹⁸⁾ 備蓄錢の研究にとっても貴重な史料である。



さて、内容についていささか検討してみる。まず花嚴坊であるが、新聞記事は当時長福寺のことを花嚴坊と称したとしているが、その明証はない。むしろこれに関わるとみられる史料が、同じ志度町の志度所在の志度寺にある。志度寺は長福寺と同じく真言宗善通寺派の名刹で、補陀落山清浄光院と号し、四国霊場八十六番札所で東讃岐随一の大寺である。同寺は長福寺からは直線距離にして約五km西、五瀬山の西にひろがる志度の平野部の東寄りに位置し、志度湾に面している。「讃岐国志度道場縁起文」⁽¹⁹⁾ には、推古天皇三三（六二五）年に凡蘭子尼が十一面観音像を造り、一間四面の精舎に安置したのに始まると伝え、また寛文九（一六六九）年の「御領分中寺々由来」⁽²⁰⁾ には「開基は持統天皇七^{壬寅}年、行基菩薩之建立にて有之事」とあるが、実際には「平安時代前期のやや下った九世紀末ごろの創建かと推察される」⁽²¹⁾ と言われている。本尊十一面観音立像は平安前期の一木造りで、国の重要文化財に指定されている。さて志度寺は、天正一〇（一五八二）年土佐の長宗我部勢の兵火に

より、伽藍をことごとく焼失したが、慶長九（一六〇四）年に讃岐一國を領した生駒親正の夫人教芳院が、前年亡くなった親正の菩提のため、米三〇石を寄進して観音堂（本堂）を再興した。同寺に伝わる「志度寺旧由余残記」⁽²²⁾（一八世紀前半の同寺住職周恵の著）は「棟木之写」として、再興された観音堂の棟木にあった墨書を引いているが、その中に次のような記載がある。

一、讃州志度寺観音堂、本願円朝法印（花押）于時慶長九年甲辰十月十三日、寺家衆花嚴坊、常樂坊、西林坊、常林坊、林蔵坊、空円坊、教円坊為式親成仏

ここに志度寺の再興に協力した寺家衆の一つとして、花嚴坊の名が登場するのである。木簡とは一二〇年余の年代の隔たりがあるが、近在の寺に同じ坊名のものであったとするよりも、両者は同じものと考えの方が自然であろう。⁽²³⁾次に述べるような志度寺をとりまく状況も、この推定に符合すると思われる。そう考えてよければ、賢秀は志度寺の塔頭である花嚴坊の住僧ということになる。

同寺は室町時代には讃岐守護細川氏の保護下にあり、志度寺宛の文明五年八月一日「細川政国禁制」⁽²⁴⁾七箇条中には「一 諸人押買事」「一 於院内伯樂市事」という項目がある。境内での押買・馬市を禁じたものであるが、これから当時志度寺では馬をも扱う市が立ち、盛んに交易が行われ、銭貨が流通していたようすが窺われよう。この禁制は文明一二年という木簡の年紀に近く、当寺の僧が大量の

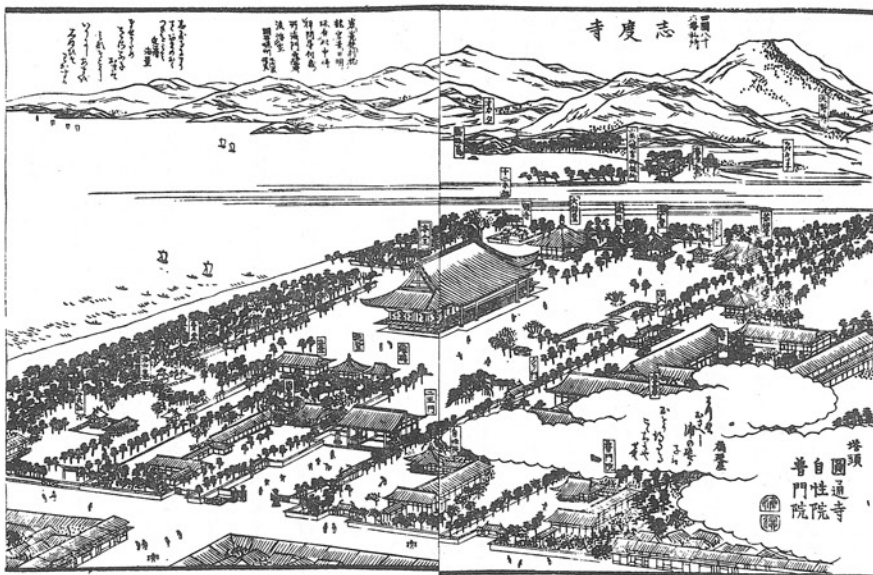
銭を備蓄できた背景を考える際に、大いに注目される事実である。なお志度寺では、六月一六日に志度寺八講（あるいは志度寺祭）が行われるが、その日は十六度市と呼ばれる市も立ち、江戸時代から讃岐屈指の大市立に発達したとのことである。⁽²⁵⁾

花嚴坊の名はさらに承応二（一六五三）年九月の「観音領検地帳」にも志度寺の塔頭として、西林坊・常樂坊とともに見えるという。⁽²⁶⁾しかるに、前引の「御領分中寺々由来」の志度寺の項には「一 寺中地藏寺、普門院、自性院、西林房、林蔵坊五軒有之事」と寛文九（一六六九）年当時の塔頭を挙げている。ここには「余残記」に見えた西林坊（房）と林蔵坊の名はあるが、他の坊はない。また嘉永六（一八五三）年成立の『讃岐名勝図会 寒川郡二』の志度寺の図絵には、志度寺の西（画面手前）に開く二王門の両脇に、南（右）から塔頭である普門院・自性院・円通寺が、また志度大宮の図の箇所には、志度街道沿いの江ノ口に地藏寺が描かれている。そしてこれら四寺は現存している。これらの変遷からすると、花嚴坊は廃絶してしまったか、あるいはその名称を変えたかいずれであろう。

しかるに『町史』によると、普門院金剛寺がもと華嚴坊と称していたといい、さらに円通寺が西林坊の後身であり、自性院は現存する常樂寺の院号であると記している。⁽²⁷⁾岡村信男氏のご教示によると、それに加え、境内の西北隅、円通寺の北に『図会』では弁天社が描かれているが、もとはそこに林蔵坊があったとのことである。⁽²⁸⁾今回

の調査では残念ながら、これらを物語る文献史料を実見することはできなかった。しかし、志度寺の西に南から普門院・自性院・円通寺・林蔵坊と並ぶ順序と、先の「余残記」の花蔵坊・常楽坊・西林坊・常林坊・林蔵坊という記載、および「御領分中寺々由来」の地藏寺・普門院・自性院・西林坊・林蔵坊を比較すると、いずれにも林蔵坊は共通し、かつ自性院＝常楽寺（坊）であるから、他の花蔵坊↓普門院、西林坊↓円通寺という変化も妥当なものと理解できよう。こうして花（華）蔵坊は現在の普門院金剛寺の前身寺院であると判明したのである。

次に木簡が「賢秀御房」と敬称を付している点については、この木簡が賢秀本人によって書かれたものではないことを物語ろう。そうとすればこの木簡の表の記載は、「賢秀御房」宛の九貫文の送り状とみることも可能である。しかし一方、裏の目下にある「敬白」は神仏への願文などに用いられる語であり、また「敬白」する人名が記されるのが通例であることからすれば、これを「賢秀御房」宛のものとするよりも、彼が「敬白」の主体であると考えのほうが自然であろう。そう考えてよいならば、銭はもともと「賢秀御房」のものであり、彼が何らかの祈願を込めて銭を進めたことを示すものと思われる。その場合、祈願の対象は、銭を埋めた土地の神、あるいは寺院境内地ということから仏などが候補にあがろうが、彼が僧侶であることからすれば、仏と考えられよう。そして前述のように



志度寺（『讃岐国名勝図会 寒川郡二』）

この木簡が「賢秀御房」によって書かれたのではないとすると、恐らくは長福寺側の人物が記したものであろう。

ところで錢の埋納が行われた前年、文明一一年は志度寺にとって大きな事件のあった年である。すなわち同年十月火災があったのである。朝吽による文明一四年三月「志度寺東閭魔堂記」⁽²⁹⁾はそれを次のように伝えている。「文明十一年十月十八日、畢方為祟、碧瓦朱甍二十余宇、食頃灰燼矣、東堂其一也、凡草創以来、火于寺者六、而東堂罹災者三于茲矣」。当時志度寺では閭羅王信仰が盛んであり、東堂（東閭魔堂）がその中心であった。この火災後朝吽が東閭魔堂の再建のため勸進に乗りだした。この「東閭魔堂記」は、東堂の由来を語り寄進を求める書である。朝吽による勸進がいつから始まったかは不明であるが、火事の翌年三月といえは再建に向けて既に動き出していたか、あるいは少なくとも策を練っていた頃であろう。朝吽は勸進を行わねばならぬ寺の財政事情を、「寺無恒産、費用居多」と述べている。

そうした時期に志度寺の塔頭花嚴坊の賢秀は、何故に大量の錢を仏に進めたのであろうか。残念ながらその理由を木簡は語ってくれない。文明一二年当時の讃岐では、前々年に徳政と号して土一揆が起こり、前年九月二五日には三谷景久の軍勢が寒川郡に攻め入り、国人領主寒川氏の居城を襲い、民家を焼くなど騒然とした状況であった⁽³⁰⁾。こうした戦国の混乱から、財産を守ろうとしたためと考える

ことも可能であろう⁽³¹⁾。

しかし先に述べたことから、想像をたくましくすれば、この錢は賢秀が誰かの供養のために、関係のあった長福寺に進めたものであり、受け取った長福寺側で賢秀の祈願を込めた錢であることを示す木簡を作成し、埋納したと考えることもできよう。それとも網野善彦氏の言われるように、一度埋めることによって錢を仏物とした上で、金融の資本にしたのであろうか⁽³²⁾。

このように様々な可能性が考えられよう。しかしいずれにせよ、何故掘り出さなかったのかという問題は残る。一時的なつもりで埋めたのに、何らかの事情でそのままになってしまったのであろうか。あるいは始めから永遠に埋めたままにしておくつもりであったのだろうか。それは全国的に多く見られる埋納錢の性格分析にも関わってくる問題である。また志度寺と長福寺は、どのような関係にあったのであろうか。賢秀は長福寺の住職を兼務していたのではないかと推測もされているが、確かなことは不明である⁽³³⁾。

この時代・地域の歴史に暗い筆者は、これ以上の追究をする手がかりを現在有していない。本稿はとりあえず、長福寺出土木簡の紹介をするという段階に止めざるを得ない。上記のような残された問題について、どなたかご教示いただければ幸いである。

注

(1) 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡二』（一九六九年）。

- (2) 瀧川政次郎『法制史論叢第四冊 律令諸制及び令外官の研究』(角川書店、一九六七年)所収(初出は『古代学』七二、一九五八年)。
- (3) 榮原永遠男「三重・柚井遺跡」『木簡研究』創刊号(一九七九年)、「柚井遺跡出土の木簡」『同前』二(一九八〇年)、「柚井遺跡出土木簡の再検討」『同前』八(一九八六年)。
- (4) 新野直吉・船木義勝『私田柵の研究』(文献出版、一九九〇年)。
- (5) 寺田貞次「讃岐に於ける貨幣貯蔵史」『高松高商論叢』一八一(一九四四年)、岡本桂典「各地域出土の渡来銭 四国地方」『考古学ジャーナル』一八七(一九八一年)、岡村信男「戦国時代に埋める 長福寺の一文銭九貫文」『志度風土記』(志度町役場公聴広報課、一九八四年)、坂詰秀一編『出土渡来銭—中世—』(考古学ライブラリー四五、ニュー・サイエンス社、一九八六年、ここには先の岡本論文が再掲されている)、『新編志度町史上・下巻』(志度町、一九八六年、以下『町史』と略記する)、網野善彦・石井進・福田豊彦『沈黙の中世』(平凡社、一九九〇年)。展示は瀬戸内海歴史民俗資料館で、一九七六年一月から七七年六月まで開かれた「讃岐の備蓄古銭展」で行われた(千葉幸伸「讃岐の備蓄古銭展」『瀬戸内海歴史民俗資料館年報一九七七—一九七七年』)。
- (6) 「長福寺由来記(二)」(『長福寺だより』四二、一九八九年)によると、長福寺ははじめ極楽寺の塔頭であったが、明和八(一七七二)年京都大覚寺の末寺となり、翌年極楽寺の末寺を離れた。さらに嘉永七(一八五四)年には大覚寺総持王院を兼ねることになった。それまでの院号は『讃岐国名勝図会 寒川郡二』に見えるように、法洞院である。その後、大覚寺派から離れ善通寺派に所属するようになったのは、一九五三(昭和二八)年のことである。
- (7) 香川県『香川叢書第一』(一九三九年)所収。
- (8) 『町史』では「往古当山は上野山の山上にあり、峰寺と称する大坊であった。その寺跡を世人は今に『かねつき堂跡』と呼び、大きな礎石を残している。天長元年(八二四)弘法大師が勅命により、当時石田(現寒川町)にあった極楽寺を鴨部東山に移転し、その南側に来覚寺を建立し、北側に上野山から峰寺を移転して長福寺と号し、この三か寺の総鎮守として志太張神社を勧請した」(『町史上巻』五六七頁)と記す。
- (9) 旧『志度町史』(志度町役場、一九七〇年)によれば、従来三間四面であったのを七間四面に改築したものであり、一九〇四(明治三七)年三月三〇日上棟であるという(九七四頁)。
- (10) 寺田貞次注(5)前掲論文。ただしこの瓦は現存しない。
- (11) 銭は出土したうち一部のみが薬師堂にあり、残りは経蔵に保管されている。また壺の蓋になっていた皿は現存しない。
- (12) 『町史上巻』一二九頁。
- (13) 注(5)前掲。
- (14) 寺田貞次注(5)前掲論文には、昭和一八年調査時で残存古銭の数は、ほぼ六九〇三文とある。
- (15) 千葉幸伸氏のご教示による。長福寺には多田明氏による「長福寺出土古銭 第一回仮調査表(拓本)」が所蔵されている。これは一紙に各種銭貨の拓本と、その解説を記したものであるが、それには四二種(うち二種は銭名を記さず)を載せている。また寺田貞次注(5)前掲論文には、別表中の銭種と重なる三〇種の他、元の至元通宝、清の乾隆通宝、朝鮮の常平通宝をあげるが、最後の二種は文明一二年より時期の下がるものであり、木簡と共に出土したとは考えがたい。
- (16) 『町史上巻』一二九頁には、長さ一八・二cm、幅四cm、厚さ三mmとあるが、幅は誤りであろう。本文の数字は、一九八七年五月に筆者が測ったもの。
- (17) これまでの備蓄銭の出土事例については、坂詰秀一注(5)前掲編

書参照。

- (18) 実は本木簡より古く、やはり備蓄銭に伴って出土した木簡のあることに、本稿作成中に気が付いた。それは、一八七六（明治九）年四月に滋賀県愛智郡肥田城跡（現、彦根市）で中国銭の入った壺が発掘されたが、その中に「応安四年」云々と書かれた板札があったというものである。しかし残念ながら、この木簡は行方不明となっていて、これ以上のことはわからない（滋賀県愛智郡教育会『近江愛智郡志』第二卷三二〇頁、一九二九年、一九七一年名著出版より復刻、矢島恭介「貨幣―本邦に於ける出土銭貨―」『日本考古学講座』七、河出書房、一九五六年）。これまでに出土した備蓄銭の例は多いので、このような木簡を伴った場合が他にもあるのではなかろうか。改めて調査する必要がある。なお石川県鶴来町清水町出土の備蓄渡来銭は、「仏供箱／金銀宮行所方／天文廿二年十二月日」という墨書のある箱に納められており、仏供箱が銭箱に転用されたと見られている（戸根与八郎「各地域出土の渡来銭 北陸・中部山岳地方」『考古学ジャーナル』一八七、一九八一年）。
- (19) 香川県教育委員会編『新編香川叢書文芸篇』（一九八一年）所収。
- (20) 香川県教育委員会編『新編香川叢書史料篇（二）』（一九七九年）所収。
- (21) 『町史上巻』八一頁。
- (22) 『町史上巻』一九〇頁。ただし筆者は後述の注（26）共ども、史料原本そのものは実見できていない。
- (23) 『香川県の地名』（平凡社、一九八九年）の「長福寺」の項は、この木簡に関して「志度寺の旧塔頭のなかに花厳坊の名がみられる」と指摘している。
- (24) 香川県教育委員会編『新編香川叢書史料篇（二）』（一九八一年）所収。

(25) 『町史下巻』九〇八頁。

(26) 『町史上巻』二七一頁。

(27) 『町史下巻』五六三・五六五頁。

(28) 『町史上巻』二七一頁によると、「志度寺の西北の方向で南北二二間東西二〇間の地」である。

(29) 香川県『香川叢書第一』（一九三九年）所収。

(30) 香川県教育委員会『新修香川県史』（一九五三年）三四〇―三四二頁。

(31) 岡村信男注（5）前掲論文。

(32) 網野善彦・石井進・福田豊彦注（5）前掲書中の網野氏の発言。

(33) 岡村信男注（5）前掲論文。

〔付記〕 本稿を作成するにあたっては、長福寺佐伯泉澄氏、志度商業高校千葉幸伸氏、志度町岡村信男氏、高瀬高校斉藤賢一氏、滋賀県文化財保護協会大橋信弥氏、京都大学堀和生氏、香川県立図書館参考調査係のお世話になりました。また木簡の写真は千葉氏、壺の写真は斉藤氏から提供して頂いたものです。記して謝意を表します。